が「案内」した。

吹所の見物が済んで、直ちに座舗で饗応となった。泉屋の「饗応取持いたし候」仕方が上手だったせいか、「就れとも酩酊」となり、「蘭人殊之外喜悦之趣」で、「八ツ(＝午後二時)過」に出立、「銅座へ帰宅」の模様であった。蘭人「土産」の品々は、

仏手甘酒
茴香酒　フラスコ入り
肉豆蔻　一壺
煙　管　弐本
　但白焼蘭製　赤焼とも壱本ツ、

舶載の酒と漬物、それに細長い陶製の煙管二本。このときのものかどうか、特定はされていないが、現在も住友家には、司馬江漢の絵や版画にも見えているハウダ・パイプが伝世品として珍蔵されている。

そこで、泉屋からも「挨拶」として「両人」へ、

松寿　酒　　弐樽　五升ツ、入
　求肥糖　二箱

の二品が贈られた。二品のうち「松寿」という名の酒については、

当方江罷越候節、右酒差出候処、其味ハひ気ニ入、数盃呑候ニ付、其時宜ニよって、見斗、差出くり候事

と、特に注記しているところをみると、シットルスたちが「酩酊」にいたった「美酒」が「松寿」という銘柄の酒であったことを知り得る。

一行帰宅のあと、「引続」いて、「友賢公」に「弥兵衛」が供をして、「餞別」の品々を宿所長崎屋為川辰吉方へ届けたところ、「又〻白赤葡萄酒フラスコ入弐ツ」を「譲請」けることとなった。

先の『商館日記』の伝える泉屋主従の酔容記事と、住友史料の伝える蘭人酩酊記事と、好一対をなしているではないか。

このような土産と挨拶や餞別の品々の贈答を通じて、舶載品の鎖国日本への流入、日本製品の流出を具体的に知ることとなる。

阿蘭陀宿におけるオランダ医師による診療活動の記録は省略されがちである。今後の発掘が期待される。

なお、大坂オランダ宿のことについては、「大坂の阿蘭陀宿長崎屋とカピタンの吹所見物」(『日蘭学会会誌』第二〇巻第二号、一九九六年三月)を参看願いたい。

(平成八年四月例会)

着想としての内視鏡

多賀須　幸　男

内視鏡を最初に思い着いたのは一八〇七年のボッチニーということになっている。しかしそれよりも十三年前の寛政六年(一七九四)に江戸で出版された「竹斉老宝山吹色」と題する

黄表紙に内視鏡の着想が描かれている。

フィリップ・ボッチニー（一七七三～一八〇九）は、「導光器、生きている動物体の、内腔および間隙を照明するための簡単な器具と、その利用法についての記述」と題する本を一八〇七年に出版した。フランクフルト・アンマインの内科・産科の開業医と自署している。

研究の動機について、全自然界における運動の法則、特に動物界におけるその詳細な観察が最終目標であったと書いている。この本が印刷された当時のワイマールには、光学や色彩に深い関心を示したゲーテが居た。導光器の光源部は高さ三五cmの花瓶のような形で、蠟燭を使用した。体内に挿入する管は、一部を取り外して治療用の器具を入れるなどのことも考えていた。鼻腔や膣のみでなく出産直後の子宮内腔や銃創などにも応用でき、生理学、病理学、外科、産科など五つの効用を上げ、例えば子宮の摘出も研究中としている。

当局から試作して有用性を確かめよとのよい評価を得ていたのであるが、アカデミーは観察出来る範囲が狭すぎると難癖をつけ、教会は隠れた人体内をうかがう魔法のランプと決め付けた。研究は放棄されて、彼も間もなく熱病で死亡した。導光器でみながらクリトリスを持続的に刺激してオルガスムの絶頂における体液の流れを観察し、生殖の理論を研究するなどと書いたのが、教会の逆鱗に触れたのではなかろうか。

「竹斉老宝山吹色（ちくさいろうたからはやまぶきいろ）」は頓智治療を集めた黄表紙で、その第一話にある臍の穴から腹の中をのぞいている木版画は、恐らく世界で最も古い内視鏡の図であろう。体内の病気を脈だけで診断するから間違いが起こるのであって、上焦の病は口から、中焦の病は臍の穴から、下焦の病は尻の穴から覗く方法を工夫したところたちまち診断がついて、見通し医者として評判になり、門前市をなしたとある。

黄表紙は江戸中期の成人向け絵入りパロディーの本で、表紙が黄色であったためにこのように呼ばれる。「竹斉」の物語は、竹斉という医師が都で流行らなくなって江戸に下るという滑稽道中記で、仮名草紙の元祖とされ、竹斉は藪医者のキャラクター名になった。

作者の築地善交は、異説もあるが、桂川甫周の弟の森島中良（一七五四～一八〇八）とされる。鶴屋から出版されたこの本の表紙は、周囲にアルファベットを配したモダンなデザインである。

病気をからだ全体が病んでいると見る東洋医学には、ブラックボックスである体内をのぞいて診断するという思想は昔も今も無い。中良がどこからこのアイデアを思いついたか分からぬが、江戸時代の日本人の遠眼鏡に対する特別な思い入れもあろう。胎内潜りという仏教の伝統も影響したかも知れない。

十八世紀末から十九世紀のドイツ医学にはロマン主義がはびこっていたが、ボッチニーの文章にもそのような雰囲気が感じられる。しかし体内を覗いて診断しようという着想の背

後には、モルガーニの病気の座という考え方が在ったに違いなかろうし、病態生理学の創始者と目される同時代のブルッセイの影響も感じられる。実際に使用された形跡はなく、その後の内視鏡の発展になんの影響を残さなかったが、脈をとる以外は患者の体に触れることすら躊躇していた当時の医学界を思えばきわめて先駆的であった。

黄表紙の始まりとされる恋川春町の『金々先生栄華の夢』が出たのは、『解体新書』が出版された翌年である。それから三十年間に二千種以上の黄表紙が出版された。日本人にとってお腹は特別に重要な意味を持っているとされ、日本の漢方医学では腹診が独特の発達をした。北尾重政が描いた遠眼鏡で腹の中を覗いている絵を、お腹を重視した日本人の病気観の現われと言っては言い過ぎであろうか。

およそ二百年が経過して内視鏡は目覚ましく進歩した。子宮を摘出できるところまでには達していないが、ボッチニーが空想した内視鏡下の手術は今や真っ盛りである。胃カメラに始まり世界をリードしている日本の内視鏡学は、竹斉老が夢見たような山吹色の宝を齎らしている。

（平成八年五月例会）

森鷗外作「なかじきり」解釈の試み
―「医」に関する言及をめぐって

志田信男

森鷗外は官を辞した一九一七（大正六）年九月に「期論」第一巻第一五号に「なかじきり」という短い文章を発表した。鷗外自身の生涯の「なかじきり」として書かれたという意味で重要なエッセイである。鷗外研究家石川淳は「鷗外随筆中もっとも精彩ある文字である」と述べ、この小文を高く評価している。しかしこの文章には鷗外の「本職」の「軍医」としての言及はごく少ないばかりでなく、鷗外風にいえば奇妙なネガティヰテを示している。これを鷗外の「謙遜」とする説もあるが、山崎正和なども「奇妙」で「考えられない」ことである、としている。様々の角度から考えておよそ「謙遜」とは遠い人物だったと思われる鷗外の文章としては、不思議ではないか、というのが小稿の出発点である。

「なかじきり」において鷗外は「医」に関して二回言及している。有名な「わたくしは医を学んで仕えた。しかし會て医として社会の問題に上ったことはない。」がその一つでここでは「わたくしの多少社会に認められたのは文士としての生涯である」と続けている。「医学者としてはたいしたことはなかったが、文学者としては社会に認められた」といっているのである。好意的な評者はこれを「謙遜」の辞ととるようだが、